

たがいに支えあえる世界へ

中洲小学校五年 加藤 虹花

体の不自由な人を見かけ、声をかけたことはありませんか。私は、体の不自由な人との協力し、おたがいに分かり合える世界にしたいと考えます。しかし、体の不自由な人をおもしろがったり、差別する人もいます。それはなぜでしょうか。体の不自由である人もない人も自分らしく生きるために努力をしています。

私は4年生のとき、手話で会話する人をドラマで見て、手話を習いたいと思い、お母さんと習うことにしました。手話とは、耳が聞こえない人と話す手段の一つとして使われています。私の通っている手話サークルでは、耳が聞こえない人と聞こえる人がいっしょに手話を学びます。手話の表現がむずかしくてダメだしをされることもたくさんあります。けれど、私は教えてもらっているときに「今、私は初めて体の不自由な人と協力しているな。」と思います。私は、そこから体が不自由であるとか関係なく、おたがいに協力することが大切だと思うようになりました。

私のこの思いがより強くなったのは、祖父の存在があったからです。私の祖父は、心ぞう病と筋肉の病気で、歩くのには杖が必要です。また、足に力が入らなくなったり、周りの人の手助けが必要なきがあります。けど地域の人たちは、病気になったあともこれま

でと同じように接してくれています。私は、病気になってしまったら落ちこんでしまうだろうけど、祖父は落ちこまず明るく本当にすごいと思いました。これから元気に長生きしてほしいです。

これらのことから、体が不自由であるとか関係なく、おたがいに協力し、分かり合える世界にしたいと考えます。そのためにはまずは、分かり合う努力が必要です。体が不自由である人もない人も、自分のことを自分でしようと努力をしています。けれど困ったときやしんどいときも協力していきましょう。私は、どんな人にもかわいそうだと思わず、おたがいのことをよく知ってほしいです。